
【富士の樹海】

ドリーム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【富士の樹海】

【Nコード】

N4886G

【作者名】

ドリーム

【あらすじ】

不景気の昨今、決して人事じゃない。そしてここにもリストラされた男が居る。ついに家賃も払えず、公園で野宿していると初老の男に声を掛けられた。富士の樹海に付き合えば良い事があると云う。

リストラされた途端に、金も無くなりアパートも追いだされた。やり直そうたって45才の中年男で結婚した事も無く、やっと出来た彼女も会社を首になった途端に俺の前から姿を消した。

それ以来、俺は無気力になり真昼だと云うのに心は闇夜の中だ。

俺は公園のベンチに横になって、これからどうしようかと考えていた。

残りの所持金は3万5千円ほど、幸い季節は夏だから公園で寝ていても、なんとかなるが節約しても一ヶ月持つかどうか、98円のカップラーメンで何日過ごせるだろうか。

所持金が切れたら終わりだ。働きたくても、こんな不景気ではどこでも雇ってくれないだろう。

する事もなく公園のベンチに寝そべり、空にポカリと浮かんで流れて行く雲を見ていた。

空を見ていると今の自分の置かれた現状が嘘のようだ。そんな時に誰かに声を掛けられた。

「もしもし兄さん、悩み事でもあるのかね」

「え！ あんたは？」

「私か、困った人を助ける者さ」

「やめてくれよ。親切を売りに騙そうたって金が無いんだ」

「そうかい。それじゃあ儲け話に乗らないんだな」

「儲け話だつて？ なんの儲け話だい。まさか人殺しなんて言うじゃないのか」

「馬鹿な。何も法に触れる話じゃないよ」

「それで俺にそんな話を持ちかけて、あんたにどんな得があるんだ」

「得か？ それはお前さんが私に感謝する気持ちがあるなら、それが俺の得かな」

「よくもシヤアシヤアと綺麗事を言うねえ。小学生だって笑うよ」

この男、年は60前後だろうか。身なりはキチンとしている。

英国製の背広に身を包み高級革で出来た鞆を持っている。

話しの内容は胡散臭いが、身なりだけなら信用出来るかも知れない。

俺はそんな風に観察した。

それにひきかえ俺の格好はジパーンにポロシャツでアパートを追い出されて5日。

ポロシャツがポロシャツに変わって洒落にもならんが、汗臭く襟が汚れていて浮浪者になりつつある。

それでも最後の望みは再就職する時の為に、大きななボストンバックに背広とワイシャツにネクタイなど一式を入れてある。

他に必要な物を入れるだけ詰め込んである。それが俺の全ての財産だ。

「なるほど綺麗事に聞こえるかね。私はいたって正直に話したつもりだが」

「感謝の気持ちだつて？ ふっふふ、やっぱり胡散臭いぜ」

「そうか残念だな。断るのは自由だ。君も最後のチャンスを掴み損ねた訳だ」

この野郎はアツサリと引きやがった。そうなると勿体ない気がするのが人の心理だ。

すっかり見透かされているようだが、仕方がない騙されて元々だ。もう失う物は無いのだから。

「分かった。騙されたと思って乗るよ」

その男はニヤリと笑って。

「よし、それではお前さん金をいくら持っている？」

「やっぱりな。そう来たか。最後の金まで取るうと云うのか」

「待て待て！ 誰も取るうと言っていない。私が観察した処、このままでは多分、君は一ヶ月後には富士の樹海をさ迷っている姿が浮かぶね」

「そんな馬鹿な……」

だが俺は言え返せなかった。半分以上は当たっているかも知れない。

「なあに、電車賃さえあればいいんだ」

「電車に乗って何処へ行くのだ」

「ほら、さつき言ったろう。その富士の樹海だよ」

「げ！ 俺はまだ死ぬと決めてないよ。ならあんたが一人で行けばいいだろう」

「そうはいかん。迷ったら最後。生きて出られんだろう」

「二人だつて同じだよ。そこに金でも埋まっているのか？」

「そうだ。金ではないが金になる話だ」

「何を言っているんだか、さっぱり分からんね」

それから30分、意味の分からないまま俺はその男の賭けに乗った。

自分の荷物を大きなコインロッカーに預け、男と駅に向かう。

もう先が見えない自分には道はなかった。騙されたらそれまでの人生。

最後の賭けに出た。

場所も丁度いい騙されたと分かつたら樹海をさ迷ってそのまま息絶えて、あの世へ行けばいい。

自殺する勇気もない俺には丁度いい場所だ。

俺達は互いに名前も聞かず名乗らず、そのまま電車に乗って青木ケ原へ向かった。

その樹海の入り口に辿り着いた時は、もう夕刻になっていた。今から入れば絶対に出られないかも知れない。

いくら夢も希望もなくなったからって、こんな賭けに俺は乗ったのか、後悔もしたがこれも自分最後の賭けだ。

それなのに、この男は裕福な人生を送っているだろうに一歩間違えれば自分だって生きて帰れないだろうが、不思議なおっさんだ。

俺達は青木ケ原に着いた時には周りにはもう薄暗くなっている。そして樹海の入りに立った。

「さて入ろうか。寒くないか？」

「その前に、此処に連れて来た理由を聞いてもいいだろう」

その男はニヤツと笑うと、用意していたのか懐中電灯を鞆から取り出した。

「あと20分くらい歩いたら話そう。そこで全てを話す」

まったくじれったい男だ。何をもちたいぶっているのだろう。

もう俺は騙されたと思っっている。この状況では絶望的だ。

男の表情が今度は真剣な顔をして、更に思い詰めた表情に変わった。

俺はもう死を覚悟していた。賭けに負けた。一人より二人の方が死を迎えるのも寂しくない。

集団自殺とまで言わないが心理とはこう云うものだろうと、そんな事を考えていた。

もう陽は完全に落ちて真っ暗だ。懐中電灯の灯りだけが頼りだ。

その灯りに驚き鳥だろうかバタバタと数羽飛び去って行った。

「この辺でいいだろう。君もその辺に座りなさい」

さあ俺の運命はここで決まる。95%は騙されたと思っ
ているが、それでも5%に俺は望みを掛けていた。

懐中電灯は二人が座った前の辺りを照らしている。

勿論その男の表情も分からない。男の次の言葉に俺は唾をゴクリと呑んだ。

「良くここまで付き合ってくれたね。改めて礼を言う。実は私の命はそう長くないんだ。私達夫婦には子供も居ない、その妻が半年前に亡くなつてね。私も末期癌に侵され余命数ヶ月と宣告された身なんだよ。実は妻の遺言でね。死んだら富士の樹海に私の灰を撒いて欲しいとね。私はその時に決めたのだよ。私も妻と一緒に樹海で灰になろうと。その為には人の助けが必要だった死にたい人間が人に頼むなんて可笑しいだろうがいざとなると勇気がなくてね。それで君を探し観察していたのだよ。私はきつと乗ってくれると信じていた。君に電車賃を出させたのは、自分の大事な金を出してまでも着いてくるか試しただけだよ」

「・・・そう云う事ですか。それで俺にアンタを殺させようというのか？」

「いやそうは言っておらん。見届けてくれればそれでいい。私は今から薬を飲む。きつとそのまま眠りから覚める事はない。私の死が確認されたら私の遺体を妻の灰と共に埋めてくれ。そこに置かれてある鞆に5千万の小切手がある。譲渡証明書を書いてあるから安心してくれ。この小切手は私の埋葬費と供養費、そして君の将来の為に差上げる」

「しかし、そんな寂しい死に方をしなくても・・・残された人生を有効に使ったら」

「いや最近モルヒネも効かなくなり、激痛に苦しむのにも耐えられない。体調が良いうちに此処に来たかった。でもどこで倒れる

か付き添いが欲しかった。それに・・・」

「それについて何だい？」

男は俺に少し厚めの封筒を渡したが、表情は苦しそうだ。もう俺には止める事が出来ない。

この男が望むなら最後の願いを叶いてやろうと決めた。

それから数時間後、彼は眠りながら旅立って逝った。

俺は一人残され真夜中の樹海で遺体を前に、不思議な今日の日を振り返っていた。

今の心境は悲しんでいいのか、喜んでいいのか分からない。

とにかく彼は夢のような話をして逝った。こうなったら遺言通り約束を果たさなくてはならない。

俺は丁寧に埋葬してやった。鞆には奥さんであうか位牌と遺影が入っていた。

おまけに蝋燭と線香まで整っている。本当に彼は覚悟が出来てここに来たのだろうか。

そして俺は、たまたま選ばれた者なのか？

まさか本当にこんな形で大金が入るなんて、本当に貰っていいのか？

迷ったが彼の言う通り有難く頂戴した。小切手の入った封筒は小切手以外に何か入っていた。

なんとそれは俺宛の手紙だ。不思議な事に俺の名前が書いてある。どうして知っているのか？

今思えば妙な事を言っていた事を思い出した。君を探し観察していたと。

『篠崎徹様。きつと手紙を読んで、君は驚かれる事だろう。覚えているだろうか。あれは3年前のこと。私は某会社の重役で取引先に急いでいた。その時にひったくりにあったのを、偶然通りかかっ

た君に取り返して貰った事がある。君は何も言わず姿を消したが、ひったくられた中身は契約書と数億円の小切手だったんだよ。私は君を探した。やっと見つけた時は私の余命は僅かだった。今更お礼と言っても可笑しいが君と最後のゲームが出来て楽しかったよ。そして世の中は決して捨てたものじゃないよ健康であれば。ありがとう。東京都港区……松本幸三郎』

懐中電灯を照らしながら読んで俺は涙した。俺は再び彼の遺体を埋めた場所に向かって合掌した。

納得して俺は小切手を貰った。考えてみれば食料も持って来ていない、あるのはお茶のみ。

もう長居は出来ない。しかしここは富士の樹海どうやって帰るといいのか。

俺はやはり死の道連れにされたのだろうか。大金があっても死んでは意味がない。

懐中電灯があっても、どうやって樹海から抜け出すというのか。

俺は懐中電灯で来た道を照らして見た。すると青白光る物体が点々と道にある。

ひとつ拾い上げて見ると蛍光塗料を塗った丸いプラスチックだった。光る道標であった。

男がいや、松本幸三郎氏が樹海に入る時、目印に落としながら来たのだらう。

彼はゲームが好きなのうだ。実に細かい演出まで考えてある。俺は三度、線香を焚いて安らかにと拝む。

彼の遺言は富士の樹海で妻と共に眠ることだ。

本来は法に触れるが、俺は彼の意思を尊重し

この事は永遠に誰にも語ることはなかった。

後に彼は行え不明者となり発見される事はなかった。

あれから三年、俺は会社に勤め、嫁さんまで貰った。
確かに世の中、生きていれば良い事もある。
三年前の人助けが今の俺を救ってくれたのか。
彼には感謝し切れない贈り物を戴いた。
そして毎年欠かさない俺の行事がある。
それはこの富士の樹海に来て彼の冥福を祈る事だった。

了

(後書き)

何時リストラされたでも可笑しくない今の世。
そんな人にも生きてさえ居ればチャンスがあると。
そんな願いを込めて書きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4886g/>

【富士の樹海】

2010年10月10日02時00分発行